

2016年度
国際キャリア開発プログラム
「合宿セミナー」

国際キャリア開発
事前学習資料集

主 催：大学コンソーシアムとちぎ 宇都宮大学
協 力：白鷗大学
後 援：（公社）栃木県経済同友会 （公財）栃木県国際交流協会、
NPO 法人宇都宮市国際交流協会 いっくら国際文化交流会 JICA 筑波
協 賛：（一財）栃木県青年会館 （公財）あしぎん国際交流財団
キリンビールマーケティング（株）栃木支社

国際キャリア開発プログラム委員会 委員長
国際学部国際社会学科 教授

重田 康博



宇都宮大学、大学コンソーシアムとちぎ、そして全国の大学生、社会人の皆さん、国際キャリアについて考えたことがありますか。

大学時代に、就職活動に入る前に、国際キャリアのプログラムに参加してみたい、国際的な問題に対応する職場や海外で国際インターンをしてみたい、あるいは今、政府、企業、大学で叫ばれている、「グローバル人材」の育成のためのプログラムに参加してみたいと思う方がいるかもしれません。

そのように考えている皆さんのニーズに応えるのが、グローバルマインドを養う「国際キャリア開発プログラム」です。本プログラムは、宇都宮大学国際学部や栃木県の大学が中心になって 2004 年から毎年実施され、過去 12 年間における参加者数は約 1350 名に及び、多くの学生（宇都宮大学生、他大学等含）が参加しております。

このプログラムの科目は、学生が働く意味やキャリア教育について考える「国際キャリア開発」、英語で全て授業を行う「国際実務英語」、国内や海外の企業、公的機関、NGO・NPO でインターンシップを行う「国際キャリア実習」の 3 科目、6 単位で構成されています。いずれも夏季と春季の休業期間に行い、講義は 1 科目 2 泊 3 泊の集中合宿方式で、キャリア実習は 80 時間で行います。本年度からは、新たに共通テーマを「グローバル化時代の地域とキャリア」とし、「地域からのグローバル化(Globalization)」、「地域のグローバル化(Glocalization)」の 2 つの柱を立て、国際ビジネス、国際協力・国際貢献、多文化共生と日本、異文化理解・コミュニケーションの 4 つのテーマで分科会を構成します。講義ではその道のプロの専門家や講師を揃え、実習では国内・海外で魅力的で個性的な研修先を用意しています。3 科目すべての実習を勧めますが、選択的な受講も可能です。

「国際キャリア開発プログラム」は、毎年宇都宮市や栃木県内だけでなく、全国から大学生、社会人が多数参加します。皆さんもこのプログラムに参加して、国際キャリアについて一緒に学び、国際社会や地域社会への「キャリアパス」の可能性を探っていきましょう。

最後に、本プログラムは、栃木県からの支援を受けて、大学コンソーシアムとちぎとの共同事業として企画しましたが、その実施に際しましては、白鷗大学からご協力をいただいたほか、(公社)栃木県経済同友会、(公財)栃木県国際交流協会、NPO 法人宇都宮市国際交流協会、いっくら国際文化交流会、そして、JICA 筑波からご後援をいただきました。また、(一財)栃木県青年会館、(公財)あしぎん国際交流財団、そして、キリンビールマーケティング(株)栃木支社からはご協賛をいただきました。ご関係の皆様からの多大なご理解とご支援に対し、主催者を代表して、厚くお礼申し上げます。

●実施要綱

- 1) 科 目 名 : 国際キャリア開発～2016年合宿セミナー～
- 2) テ ー マ : グローバル時代のキャリア形成を考える
- 3) 日 程 : 2016年8月27日(土)～29日(月)＜2泊3日＞
- 4) 会場・宿泊 : コンセーレ(栃木県青年会館)
 ＜所在地＞〒320-0066 宇都宮市駒生1丁目1番6号
 ＜問合先＞TEL: 028-624-1417
 ＜URL＞ <http://www.concere.jp/>
 ＜地図＞



- 5) プログラム : 2頁を参照
- 6) 参加定員 : 70名
- 7) 参加費 : 10,000円(食費・宿泊費を含む)
- 8) 問合せ : 宇都宮大学国際学部 事務室(5号館A棟1階)
 担当 : 山口 陽子
 ＜所在地＞〒321-8505 宇都宮市峰町350
 ＜問合先＞TEL: 028-649-5172 FAX: 028-649-5171
 E-mail: kokuca@miya.jm.utsunomiya-u.ac.jp

●プログラム（敬称略）

1日目（8月27日 土曜日）

時 間	内 容
09:00～09:30	受付
09:30～09:45	開講式・オリエンテーション
09:50～12:00	全体会（全体講義・ワークショップ）
12:00～12:50	昼食
13:00～13:20	趣旨説明（分科会および全体発表のプレゼン方法の説明など）
13:20～15:20	パネルトーク「グローバル時代におけるキャリア形成について」
15:50～17:50	分科会 1
	分科会「国際ビジネス A」 講師：生方 玉也
	分科会「国際協力・国際貢献 B」 講師：佐藤 栄治
	分科会「国際協力・国際貢献 C」 講師：伊藤 解子
	分科会「国際協力・国際貢献 D」 講師：今井 麻希子
	分科会「多文化共生と日本 E」 講師：立花 有希
	分科会「異文化理解・コミュニケーション F」 講師：石井 裕香
17:50～18:30	チェックイン（事務局担当者より鍵を受領）
18:30～20:00	夕食・交流会

2日目（8月28日 日曜日）

時 間	内 容
07:30～08:20	朝食
08:30～12:00	分科会 2
12:00～12:50	昼食
13:00～15:30	分科会 3
15:30～17:30	分科会 4（分科会まとめ・中間発表準備）
17:30～18:30	中間発表
18:30～19:30	夕食
19:30～21:30	全体発表準備

3日目（8月29日 月曜日）

時 間	内 容
07:30～08:20	朝食
09:00～10:00	発表準備
10:00～12:20	全体発表
12:20～13:10	昼食
13:20～15:00	ふりかえり／意見交換／全体総括／アンケート記入
15:00～15:15	閉講式
15:30～	バスで宇都宮駅・宇大に移動・解散（現地解散も可）

1. 国際キャリア開発プログラム倫理綱領

本プログラムの関係者は、以下の原則に従って行動します。

- ① その活動において、常に基本的人権と個人の尊厳を尊重します。
- ② 国際学部並びに本プログラムの教育目標の実現に資する教育を行うために、改善と向上に努め、学生の自発的な学習を支援します。
- ③ 学修目標を明確に示し、学生への対応や成績評価などの学生指導全般において、公正を確保します。
- ④ 個人情報の保護に最大限の注意を払います。

2. 倫理綱領に基づく個別ガイドライン

以上の倫理綱領に基づき、特に以下の点について配慮をお願いいたします。

- ① 人種やジェンダー、言語、宗教、国籍、社会的背景、年齢等が異なる多様な参加者で構成されているプログラムであることに留意しつつ行動します。
- ② 食事や信仰生活を含む生活様式を尊重し、可能な限り対応します。
- ③ ハラスメントに該当する行為は決して行いません。
- ④ ハラスメントに関する情報を得たり相談を受けた場合には、放置せずに対応します。
- ⑤ 参加者による主体的な学びを尊重し、その提案や意見を積極的に取り入れます。

3. 具体的な過去の問題事例

(事例にある「参加者」とは、講師、スタッフ、学生等の参加者全員を意味します。)

事例 1) 国籍による差別発言

ある参加者から「A 国人は物を盗む」といった国籍による差別的な発言があり、その国籍を有する他の参加者の尊厳が傷つけられる事態が発生した。

事例 2) ジェンダーや多様性への配慮を欠いた発言

ある参加者が、男性的な服装をしている女性の参加者に対して、「いい歳なのだから、もう少し女性らしくしないと」とジェンダーに関する配慮に欠ける発言があった。その結果、トランスジェンダー¹であるその女性参加者の尊厳が傷つけられる事態が発生した。

事例 3) ハラスメントに該当する行為や発言

ある男性参加者が懇親会で他の参加者に酒を飲むようにしつこく勧め、男女問わず「付き合っている人はいるのか」等と質問をして無理に答えを聞こうとしたり、女性の参加者に対して酔っ払いながら「肩をもんでくれ」と頼んだりした。

事例 4) 主体性や協働を認めない教育

分科会において講師が一方的に講義を続けたり、一部の参加者のみが発言を独占する事態が発生した。その結果、学生たちが主体的に協力しながら行う議論や全体発表準備のための作業時間を、十分確保することができなかった。

事例 5) 許可を得ないで行う個人情報や写真の使用

ある参加者が、他の参加者の連絡先などの個人情報や撮影した写真を、相手の許可なく SNS などを使って公開し、別の目的で利用した。

¹ トランスジェンダーとは、出生時に決定された性別に性的違和（性同一性障害）があり、性別を変えて生活していたり、性別を変えたいと思っている人（性と人権ネットワーク作成パネル、2014 年より）。

今求められるグローバル人材とは？

☆講師プロフィール

氏 名：田巻 松雄（たまき まつお）

所 属：宇都宮大学 国際学部長

略 歴：

1956 年生まれ。宇都宮大学国際学部長。筑波大学大学院社会科学研究所修了。社会学博士。1996 年より宇都宮大学国際学部に勤務。

2008 年、国際学部が地域の国際化を推進する教育研究拠点として開設した多文化公共圏センターの初代センター長に就任。現在、外国人児童生徒支援を目的とする同センターの HANDS プロジェクト担当代表を務める。



全体講義の概要

「グローバル人材」と聞いて、皆さんはどんな人材を思い浮かべるでしょうか。

日本で「グローバル人材」ということばが広く使われ始めたのは4、5年前のことです。平成22～23年にかけて、「グローバル人材育成」について話し合う国レベルの会議がいくつか開催され、報告書が出されました。会議の開催趣旨としては、「我が国の**成長**を支えるグローバル人材の育成とそのような人材が育成される仕組みの構築を目指し、とりわけ**日本人の海外留学**の拡大を産学の協力を得て推進する」と書かれています。また、「日本企業のグローバル化を推進することが、激しさを増す国際的競争環境のなかで日本が生き残る条件」であり、そのためには「海外市場（特にアジアの新興国市場）に目を向ける必要性があるが、企業のグローバル化を推進する役割を担う国内の人材不足が深刻化している」とも書かれています。グローバル人材は **Global Human Resource** とされていますが、強く意識されているのが、日本企業のグローバル化を担う「外向き」の人材であることは明らかです。そして、グローバル人材育成を目指すべき高等教育における最重要課題は、若者の「内向き志向」の解消であり、海外でのグローバルな環境で活躍するための語学力や異文化理解・活用力の要請とされています。

経済やビジネスの世界でグローバルに活動・活躍する人材の育成はとても重要なことです。ただし、「グローバル人材」の育成は、経済やビジネスに加えて、社会・文化・政治の分野でも求められています。そして、日本国内の地域と海外の地域の両方に目を向ける必要があります。つまり、グローバル化に伴って生起する国際社会・地域社会の諸課題を発見・分析し、様々な人間同士の共生の視点から創造的な地域の発展に貢献できる人間力を持つ人材の育成こそがより問われていると言えるでしょう。換言すれば、日本の各地域において国際的な社会・経済・文化・政治の共生に関して活動を広げる「地域のグローバル化」と日本の各地域から社会・経済・文化・政治に関連して世界の各地に活動の場を広げ

る「地域からのグローバル化」に向き合うことが出来る人材の育成が求められているのです。

当日は、以上のことを踏まえて、最近意識しているグローカルリーダーやグローバル・コンピテンシーの言葉に引きつけて「今求められるグローバル人材」についてお話したいと思います。ここでの最後に、グローバルな課題発見力や課題解決力を発揮する人間の活動力について若干課題提起しておきましょう。ハンナ・アレントは、条件づけられた人間が環境に働きかける内発的な能力、すなわち「人間の条件」の最も基本的要素となる活動力を、＜労働＞（labor）、＜仕事＞（work）、「活動」（action）の3つに分類して考察しています。グローバルな課題・問題に向きあう行為は「仕事」だけではありません。普段何気ない行為の中にもグローバルな課題・問題に向き合えることがあることについても言及したいと考えています。

海外で働く、起業すること

☆講師プロフィール

氏 名：生方 玉也（うぶかた たまや）

所 属：株式会社エイム 相談役

略 歴：

1952 年生まれ、群馬県出身。家電メーカーに勤務し、TPM（Total Productive Maintenance）世界大会へ日本代表として参加。その後、ベンチャー企業にて、常務、社長、代表取締役を経て株式会社エイムの相談役に就任。海外経験も長く、シンガポール駐在、ベトナムにて会社を設立し社長。その間に訪問した国約 40 ヶ国。現在は、本業の他栃木県経済同友会にて社会貢献活動推進委員長、国際化推進副委員長をつとめる。



1. 仕事の内容・研究テーマ

現在は車の内外装部品の開発製造を行っている。車業界でも完成車メーカーだけでなく、中小企業まで海外展開が進んでいる。私は 36 才（1989 年 1 月）から東南アジアを中心に海外駐在、海外担当として 15 年間海外生活を送ってきた。その間、ベトナムにて会社設立も経験した。今なぜグローバル化、ダイバーシティ等の議論が盛んになっているのか？みんなで議論し理解を深める。又、海外で学ぶ・働くことの意義を学ぶ。

2. キャリアパス

大学卒業後、大手家電メーカー関連会社に勤務。改善手法 I E、Z D、Q C、T Q C 等を学ぶ。

36 才の時（1989 年 1 月 7 日）シンガポール赴任。赴任時英語が全く解らず一念発起し現地の英会話学校夜間に通い勉強をした。1994 年にはベトナムのホーチミンに会社を設立。投資申請、土地取得、工場建設、幹部社員採用を経験。その間、現地の社員、現地の方々とのお付き合いの中で沢山のことを経験した。1996 年帰国。その後も 2004 年まで海外業務を担当。その間訪問した国約三十数か国。

海外経験の中で日本は如何に良い国、生活しやすい国であるかを感じている。但し、もしかしたら幸せに浸りすぎて世界を視る視線が不足していないか？と感じる時がある。

3. 分科会の内容

- 海外（主に東南アジア）で働くこと、起業することについて、自身の経験を含めた議論により理解を深める。
- グローバル社会と言われて久しい（1989 年 11 月 9 日：ベルリンの壁崩壊）が、日本の若者は内向きといわれる事が多い。

- 何故内向が多いといわれるのだろうか？
- グローバル人材とは・・・？
- 外向き、内向きってどういうこと？
- 海外で学ぶ・働く・起業するとは・・・？
- 今なぜ海外なのか。
- 海外で学ぶ・働く・起業するためのアクションプランを企画立案する。

4. キーワードリスト

グローバル化、グローバル人材、ダイバーシティ

5. 参考資料等

- ドラッガー関連本
- ドラッガーが語るリーダーの心得 青春出版社 小林 薫
- 頂きはどこにある 扶養社 スペンサー・ジョンソン
- チーズはどこに消えた 扶養社 スペンサー・ジョンソン
- サイゴンのいちばん長い日 文春文庫 近藤絃一

6. 事前予習用リーディング課題

＝自分の興味のある国を前提に＝

- ① その国に興味を持った理由。
- ② その国に留学する、その国で働く為にはどんな準備が必要か。
- ③ その国へ留学、働くことで何を行い、何を得たいか。

超高齢社会を考える

☆講師プロフィール

氏 名：佐藤 栄治（さとう えいじ）

所 属：宇都宮大学 地域デザイン科学部
建築都市デザイン学科 准教授

略 歴：

1976 年生まれ。厚生労働省国立保健医療科学院を経て、2010 年より現職。専門は、都市計画、医療・福祉（介護、保育、障害など）

政策支援。近年では、医療計画策定に向けた基礎研究、地方都市における医療・介護の連携のあり方、公共施設のマネジメント手法等、国、県、地方自治体との実践的な研究に取り組んでいる。



1. 仕事の内容・研究テーマ

私はこれまで、都市や建築の諸問題を利用者や居住者の視点から捉え、その解決策を探る研究を行ってきました。特に最近では、生活のうえでさまざまな支援や配慮を必要とする、高齢者や障害者、こども、こどもを抱える就業者を対象に分析・研究を行うことで、あらゆる人にとって使いやすい都市や生活環境について考えています。研究の中では、実現可能な計画や施策策定の手段として各種統計情報や統計を地理的に表現できる地理情報システムや、ある側面から事象の理想像を示す理論モデルを用い、計画や政策の背景や数値の算出根拠を示しています。主として以下の研究を行いました。

（１）都市における高齢者の生活を想定した理論的なアクセシビリティ指標の開発

本研究は、郊外の集合住宅群や地方都市において、今後激増する高齢者の生活を徒歩による移動により担保しようとした一連の研究です。徒歩による移動には、対象地域の地形の状況、集合住宅の階段の有無、面的に広がった生活圏など、移動に際しての物理的な抵抗を指標化し、その困難さを露呈させています。有効性の確認された指標を用い生活利便性の低い地区を抽出し、それらの地区での生活手法や住み替えの提案を行いました。

（２）高齢者サービスの整備方針に関する研究

近年の介護施策の方針では、地域包括ケアシステムや介護サービス付き高齢者向け住宅等の整備が進められています。2014 年 7 月の地域包括ケアシステム指針の公表に連動し、市区町村レベルでの介護計画指針、地域包括ケアの捉え方が検討され、各自治体において具体的な制度設計が望まれています。現在、自治体と連携し研究成果を実際の計画に反映しつつ、さらなる研究の深化を試みています。

（３）医療施設配置計画、医療サービス提供体制の再構築に関する研究

近年の日本においては、人口減少や地域の縮退等を背景として、地域医療体制の再構築

が求められています。人口減少に連動して社会的共通資本の総量が減少する社会においては、医療サービスの提供にその効率性や公平性も求められています。医療サービス提供体制の適正化に向けた知見を得るため、居住者から医療施設へのサービスの到達性を計測することで、医療サービス提供体制の地域的特徴を定量的に明らかにすることを目的とし、提供体制再構築に向けた基礎的分析を試みています。

その他、子育てと就労・職住構造のあり方に関する研究、幼保一体型施設の計画に関する研究、保育施設のマネジメントに関する研究、小児病棟における療養環境評価の策定、公共施設のマネジメントに関する研究を進めています。最終的には統合的な社会モデル構築（社会的共通資本のあり方）に向けた種々の分析を進めていきたいと思います。

2. キャリアパス

私は宇都宮大学工学部建設学科を卒業した後、東京都立大学大学院・工学研究科建築学専攻・修士課程・博士課程（現、首都大学東京）と進学しています。進学を決めたのは、もっと世の中の仕組みが知りたい、世の中の問題を解決する仕組みを知りたい、という知的好奇心からだったと思います。実際、修士課程を修了する時に企業の内定をもらっていましたが、知的好奇心が勝り博士課程に進学しました。専攻した都市計画・空間情報科学分野は、社会問題を数理的に解く研究が主流です。様々な問題解決手法（分析、解析、数理モデル、統計処理、大容量データの分析、シミュレーション手法など）を、学生の間に学びました。大学院修了後は、学術振興会の研究員（高齢者の生活基盤整備の研究）、明星大学アジア環境研究センターの研究員（タイの農業・都市政策）、厚生労働省の研究員（子育てと就労に関する研究、介護政策に関わる基礎研究、医療サービスの公平性に関する研究など）を経て、現在の宇都宮大学で教員をしています。

一見バラバラに見えるキャリアですが、社会問題を解く、またその解法から導きだせる将来像を明示する、という、自身の知的好奇心を掻き立てた事柄からは逸れていません。それらを社会に役立てることのできる場所に異動していったと思います。

3. 分科会の内容

【テーマの概要】

日本の超高齢社会化は世界一進んでいるとされ、日本が抱える社会問題は、今後超高齢社会を迎える国々から注視されています。本分科会では、超高齢社会の現状を知ると共に、国際的な社会的共通資本（医療・介護）のあり方について議論します。

【テーマの背景にある問題意識】

超高齢社会の背景には、それぞれの国の社会保障制度、憲法、そして大きくは倫理観が関連してきます。それらの全てを分科会で説明するには時間が足りなく、断片的な情報の提供となりますが、皆さんの興味に合わせ背景を説明していきます。

【分科会の進め方】

以下の内容を想定していますが、興味、進度によって調整していきます。

- ① 超高齢社会の現状のレクチャー
- ② グループでの検討の上、超高齢社会を議論する論点の整理
- ③ 設定した論点についての情報収集、分析（web等を利用）、課題解決方法の議論
- ④ 個人や組織、国単位でのアクションプランの設定

4. キーワードリスト

社会的共通資本、超高齢社会、医療・介護問題、他国での高齢期の過ごし方

5. 参考資料等

- 高齢社会白書、内閣府、<http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/index-w.html>
- 社会的共通資本、宇沢弘文(著)、岩波書店、ISBN-10: 4004306965、ISBN-13: 978-4004306962

6. 事前予習用リーディング課題

上記の2種の資料を事前に目を通しておくことが望ましい。

国際協力ってなんだ？これだ。

日本で現場で、目指すもの。

☆講師プロフィール

氏名：伊藤 解子（いとう ときこ）

所属：国際協力コンサルタント

JICA 短期専門家（教育分野）



略 歴：

マレーシア、シンガポールで民間企業勤務後、（公社）シャンティ国際ボランティア会でカンボジア、ラオス、アフガニスタン等の教育協力事業に 14 年間従事。JICA 本部勤務等を経て、現在ラオスで JICA 初等教育事業に従事。中央大学経済学部卒業。中央大学大学院経済学研究科中退。英国リーズ大学院開発学、英国ロンドン大学東洋アフリカ学院（SOAS）地域学（東南アジア）修士号取得。

1. 仕事の内容・研究テーマ

専門分野は、教育開発、参加型開発、事業運営・評価、NGO。大学院では、経済学をベースに開発学、東南アジア地域学専攻。日系企業の途上国への直接投資の影響と課題、途上国政府の政策による地域間経済格差等、大きな力による経済発展とその影を研究。教育協力 NGO 勤務を通じて、教育開発、事業運営手法、ODA への政策提言に関する経験を蓄積。現在は、ラオスの初等教育の質を改善するための地方行政官研修技術支援に従事。

2. キャリアパス

<大学、大学院時代>

両親の影響で、幼い頃から平和な差別のない社会の実現について、問題意識を持って育つ。学生時代、日本の政府開発援助(ODA)供与額が世界一となる一方、ODA の質への批判が高まる。ゼミでは南北問題をテーマにし、学外の ODA に関する NPO、NGO のセミナーや報告会に通う。サークルでは、日韓学生交流会、模擬国連等に所属。更に体系的に勉強したいと考え大学院へ進学。指導教授からも、外に出なさい！と言われ、英語力の為にも英国の大学院に進学。

<民間企業から NGO へ>

NGO 就職を視野に、社会経験のため、東京で欧米企業の OL になるより東南アジアで働こう、と現地で単身就職活動。クアラルンプールとシンガポールの日系民間企業で、日本からの駐在員と現地採用の格差を見ながら、急速に経済発展する両国での OL 生活を謳歌。2 年半後、軌道修正のため 6 年ぶりに日本へ帰国し、教育協力 NGO シャンティ国際ボランティア会(SVA)東京事務所にカンボジア事業担当として入職。

<NGO での 10 年>

東京での仕事は、ドナー対応、資金調達、事業運営後方支援が中心。ご支援者に鍛えていただく。現地駐在 2 年を経てカンボジアに 5 年関わった後、アフガニスタン事業担当→企画調査担当（事業研究・評価、コンサルティング業務）、教育協力 NGO ネットワーク (Japan NGO Network for Education; JNNE) 事務局（政策提言、NGO 職員研修）→緊急救援事業担当（パキスタン、バングラデシュ）に。愛・地球博 NGO パビリオン出展運営にも従事。

<NGO でのマネジメント時代～現在>

SVA 入職後 9 年目、SVA 東京事務所海外事業課課長となりマネジメントに関わる。その後、SVA ラオス事務所所長としてラオスに赴任。組織・事務所運営（総務、経理、人事）と教育協力事業運営に従事。組織改革、人材育成に全力投球した結果、アウトプットし尽くした自分へのインプットが必要な時期と考えて退職。長期休暇中、やはり自分の関心は国際協力にあると考え、業態を変えて JICA 本部へ就職。その後、流れで個人コンサルタントに。NGO にはボランティアや熊本地震支援にサポート従事するなどして関わり現在に至る。

3. 分科会の内容

国際援助、国際協力とは具体的に何をするのか。NGO も ODA 事業も共通して必要とされる大切なこと。仕事を通して自分が目指すもの。を具体的にイメージできるようになることを目的に、教育協力を事例に、参加型ワークショップ、ディスカッション形式で進めます。

- 分科会 1 : 参加者自己紹介。国際協力、国際援助の仕事紹介（国際機関、JICA、NGO の事業について、教育分野の事業を事例に）。
- 分科会 2 : 協力・援助って必要？そもそも自分は何を思う？何かしたい？
- 分科会 3 : 援助って何をする？どんなアプローチができる？

4. キーワードリスト

国際協力、教育協力、政府開発援助(ODA)、NGO、政策提言

5. 参考資料等

- アマルティア セン『人間の安全保障』集英社新書、2006 年
- 大菅俊幸『泥の菩薩—NGO に生きた仏教者、有馬実成』大法輪閣、2006 年
- マララ ユスフザイ、パトリシア マコーミック(著)、道傳愛子(翻訳)『マララ 教育のために立ち上がり、世界を変えた少女』岩崎書店、2014 年
- シャンティ国際ボランティア会編『図書館は、国境をこえる—国際協力 NGO 30 年の軌跡』教育史料出版会、2011 年

6. 事前予習用リーディング課題

- (<http://www.kokusai.utsunomiya-u.ac.jp/career-program/activity/2016jizensiryou.html> からダウンロード可)
- 「第 3 部 国際教育協力のアプローチ：第 8 章、第 9 章、第 10 章」小松太郎編『途上国世界の教育と開発 - 公正な世界を求めて』上智大学出版、2016 年；pp.115-160

世界を変える働き方とは ー

「生物多様性」と国連持続可能な開発目標から考える未来像

☆講師プロフィール

氏 名：今井 麻希子（いまい まきこ）

所 属：国連生物多様性の 10 年市民ネットワーク 企画提言委員

略 歴：

国際基督教大学卒業後、外資系企業勤務等を経てフリーに。生物多様性条約の国際会議（COP10）に NGO ネットワークの事務局として参加したこときっかけに、環境やソーシャルの分野に転身。執筆・編集・教育事業などに携わる他、セラピストとしても活動する。執筆協力に『希望をつくる仕事 ソーシャルデザイン』（宣伝会議）『シャプラニール流 人生を変える働き方』（エスプレ）等。



1. 仕事の内容・研究テーマ

NGO の活動（無償）としては「国連多様性の 10 年市民ネットワーク」という団体に所属し、「生物多様性」や「自然共生」をキーワードに「暮らしの現場の声を、国際会議をつなぐ」をモットーに、政策提言や普及啓発を行っています。また、SDGs や防災・減災をテーマにした CSO（市民社会組織）ネットワークに参加し、市民社会の連携促進に携わっています。

仕事としては、「生物多様性」「ソーシャル」「ESD（持続可能な開発のための教育）」「ダイバーシティ」をテーマにした執筆・編集、教育プログラムの開発、中間支援組織の情報発信支援等を手がける傍ら、セラピストとして個人やグループに対するカウンセリングを提供しています。

いずれにも共通するのは、「自然にも、いのちにも、やさしい社会をめざすこと」。さまざまな課題を前に、批判し、絶望するのではなく、そこから希望を見つけようとする眼差しを持ち続けること、その“可能性に開かれた姿勢”を大切にしたいと思っています。

2. キャリアパス

<生い立ち>

宇都宮市の農村地域に兼業農家の娘として生まれ育ち、かつては「田舎も、農業も嫌い」でした。海外に憧れ、高校時代に交換留学で 1 年間米国アラスカ州に滞在。得意と思っていた英語が通じず、おしゃべりだったはずが口下手となり、いわゆる「マイノリティ」としての自分を体験します。イヌイトと呼ばれる先住民族の人たちの存在との出会いも、印象的な出来事でした。

＜大学時代＞

幼い頃、日本社会にも差別があること（そして、それを大人たちが「そういうもの」として、受け入れている現実）にショックを受けたことの影響からか、「平和研究」が学べる大学を選び、国際基督教大学に入学。国連職員に憧れ、学生時代は「模擬国連」というインカレの学生サークルに所属。「国連学連」という組織のメンバーと「若者の声を国際会議に届けよう」と、北京で開催された世界女性会議にユースとして参加。世界の多様な NGO の人たちとの出会いが刺激的でした。ベトナムやタイといった開発途上国にフィールドワークに訪れたり、国連機関でアルバイトする経験に恵まれましたが、自分はいわゆる国際公務員には向いていないと考えるようになり、自由な社風に惹かれ外資系企業へ就職しました。

＜外資系 IT 企業時代＞

新卒入社した外資系 IT 企業では人事部に所属し、人材育成や事業部支援などを担当しました。「転職でキャリアアップ」という考えが定説の業界。組織改編や人員整理も多く、ダイナミックな職場環境でした。

次の職場は、海外 IT ベンチャーと日本企業のマッチングを専門とするコンサルティング会社でした。商習慣や技術仕様の違いを踏まえた「橋渡し役」です。次第に B2C の仕事に関心が移り、転職を決めました。

＜アニメーション制作会社時代＞

日本のアニメーション制作会社（ベンチャー）に転職しアシスタント・プロデューサーに。ビジネスと制作現場、国内外のクリエイターをつなぐことは地味ですが、非常に創造的でやりがいのある仕事でした。

＜突然湧いた「東京を離れよう」という感覚＞

3 年程のスパンでいくつかの職場を経験し、恵まれた生活を過ごしていましたが、ある日ふと「東京都心部での便利で快適な生活」を続けることに疑問を感じるようになりました。「それは永遠に続くものではなく、実はとても危ういものなのではないか」という直感的な感覚から、あてもないまま「名古屋」へ。「言葉を使う仕事がしたい」「人のところに触れる仕事がしたい」ということだけを決めていました。

＜生物多様性との出会い＞

偶然の出会いからこの地で「生物多様性条約」の国際会議が開催されることを知り、その会議に向けて結成される NGO ネットワークの事務局国際担当に関わることになりました。その頃から環境をテーマにした執筆業も始めました。こういった流れで培われた関係性や課題意識が、現在の仕事につながっています。また「課題の平和的解決」「うちなる自然との調和」に関心を持ち、セラピストとしても活躍を始めました。

3. 分科会の内容

このままでは、地球が持たない。だからこそ「変革」が必要とされています。そして、変革のためには、学際的な視点を持つこと、多様な価値観やアイデアにオープンであることが大切です。この分科会では「生物多様性」をひとつのキーワードに、自然と共生する社会の実現に向けたアイデア、働き方を探求します。

4. キーワードリスト

生物多様性、SDGs、CSR、ダイバーシティ、レジリエンス

5. 参考資料等

- 『希望をつくる仕事 ソーシャルデザイン』（宣伝会議）

6. 事前予習用リーディング課題

- パートナシップでつくる私たちの世界／国連の新しい目標 - 2030 年に向けて -
<http://sus-cso.com/kiji/report160331> （ダウンロード可能）

すべての子どものための学校

☆講師プロフィール

氏 名：立花 有希（たちばな ゆき）

所 属：宇都宮大学 国際学部 講師

略 歴：

大学院修了後、中学校・高等学校（数学）、専門学校・大学（教育学）で非常勤講師として教育に従事し、2014 年より現職。専門は比較教育学で、主な研究テーマは、ドイツにおける移民の子どもの言語教育。



1. 仕事の内容・研究テーマ

比較教育学が専門で、ドイツの異文化間教育をテーマとした研究に取り組んでいます。特に、移民背景を持つ子どもなど多言語環境で育つ子どものことばの教育に関心があります。最近では、就学期の子どもの言語発達と教育について、日独比較研究をしています。

学校の授業で使われる言語と家庭で使っている言語が異なる場合、子どもの学業達成が相対的に困難になることについて、近年さまざまな調査研究が進められてきました。この問題の原因を解明すると同時に、言語の違いが学習条件を不利にすることのないように教育環境を変えていく努力が求められています。

2. キャリアパス

数学の教員になるつもりで大学に進学しました。どうすればいい教師になれるか、そもそも学ぶとは何か、と考えているうちに、大学院進学という道が浮かんできて、教育学の修士課程に進みました。「人権としての教育」という考え方に強く惹かれたので、それをテーマとした研究がしたいと考えていたのですが、具体的な題材を見つけられず右往左往していたところに指導教授が紹介してくださったのが、『ドイツの異文化間教育』という 1 冊の本でした。「人権」ということばを使わなくても「人権」について考えられることに気づき、求めていたものに出会えた感激しました。

修士課程を終えて、私立の中学校・高等学校で非常勤講師として数学を教えたり、ドイツ語を学んだり、と研究を続けるための（心の）準備期間を経て、博士課程に入りました。職業については、専門性を生かした翻訳の仕事などに就けたらいいなあなどと漠然と考えていただけだったのですが、博士論文を完成させる直前のドイツ調査で 5 州 6 都市を 3 週間かけて回ったときに、その面白さにのめりこみ、これを仕事にしようと心に決めて、研究者になるための就職活動を始めました。そんな私を採用してくれたのが、宇都宮大学国際学部だったというわけです。

3. 分科会の内容

「すべての子どものための学校」という題目で、学校が子ども一人一人の発達可能性を十分に伸展させていく場所となるために求められることについて考えます。それは、すなわち「人権としての教育」を考えることでもあります。現実にある課題に対して、対症的な解決策を求めるだけでなく、それをより深く、広い枠組みの中に位置づけることで、参加者が問題を本質的に理解できるようになることを期待しています。

そのために、分科会では、日本の外国人児童生徒教育や特別支援教育をドイツの異文化間教育やインクルージョン教育の動向と対比させながら、一人一人の子どもの立場から、その子にとって最善の教育とは何かを考えるための話題提供をします。そこから、最も大きな問題だと思われること、あるいは最も早く解決されるべき課題だと考えられることを見つけ出し、その改善に向けた提案をまとめてほしいと思います。

4. キーワードリスト

外国人児童生徒教育、特別支援教育（インクルージョン教育）、母語・第二言語

5. 参考資料等

- 佐久間孝正（2015）『多国籍化する日本の学校 教育グローバル化の衝撃』勁草書房
- 宮島喬（2014）『外国人の子どもの教育 就学の現状と教育を受ける権利』東京大学出版会

※以下の2冊は、より専門的に学びたい人に向けた紹介です。

堀尾輝久（1991）『人権としての教育』岩波書店

天野正治編著（1997）『ドイツの異文化間教育』玉川大学出版部

6. 事前予習用リーディング課題

（ <http://www.kokusai.utsunomiya-u.ac.jp/career-program/activity/2016jizensiryou.html> からダウンロード可 ）

- 佐久間孝正「『多文化共生』社会と教育の課題」近藤敦編著（2011）『多文化共生政策へのアプローチ』 pp.125-147

未来の Intercultural Communicator をサポートすること

～教育活動における国際交流を通して～

☆講師プロフィール

氏 名：石井 裕香（いしい ゆか）

所 属：作新学院高等学校 教諭

略 歴：

大学在学中、短期留学推進制度により中華人民共和国に1年間短期留学。2001年より、私立作新学院高等学校に勤務。これまでに、姉妹校交流としてのアメリカ海外研修や、北京・台湾の高校生との交流事業に携わる。



1. 仕事の内容・研究テーマ

2001年より、英語教諭として作新学院高等学校に勤務しています。担任としての学級経営と教科担当としての授業のほか、「国際理解教育係」として学校内外の国際交流事業の案内・引率等の役割を担っています。グローバル人材育成に向けた動きや大学入試改革などを鑑みますと、これまで以上に“ツール”としての英語の習得を意識せざるを得ません。英語教育や外部検定試験のシンポジウムに参加したりしながら、日々の授業についてどうあるべきかを研究しているところです。

2. キャリアパス

〈大学時代〉

私は大学2年次に学部の留学報告会に参加し、先輩方の体験談を聞きました。その時、自分は世の中のことがほとんど分かっていないということを実感すると同時に、自分の経験から考えたこと・肌で感じたことをベースにものを語らなければ、無責任なのではないかと思ったのです。そして、本や新聞・テレビで見聞きするものを、実際に自分の目で確かめてみたいと感じるようになりました。そこで、文部科学省の短期留学推進制度を利用した留学を目指すことになりました。

1年間の上海での生活は驚きの連続でした。語学については一般教養科目と学部の「中国語会話」でしか勉強しておらず、今振り返ってみるとかなり準備不足な学生であったと思います。復旦大学で学ぶ当時の生活は我慢を強いられることも多くありましたが、自分自身の特性や日本のことをよく知るきっかけにもなりました。

この留学経験を何かに生かすことができるとすれば、留学報告会で知り合えた先輩方がそうしてくれたのと同様に、自分の経験を伝えていくことがその第一歩ではないかと考えました。その結果、就職に際しては教職を選択するに至りました。

〈初任～2年目〉

専門教育を主とするコースの所属であったため、英語の授業としては基礎基本を中心に、「英語嫌いを増やさない！」という思いで必死でした。初めて出会った生徒たちとコミュニケーションすることは、まさに異文化理解に近いもののようには感じたときもありました。

部活動の顧問としては、ボランティア部を担当することになりました。主な活動の1つに、海外支援活動がありました。卒業時に不要となった体育館シューズを外部団体を通じて発展途上国へ送る活動を行っていました。

〈3年目～8年目〉

進学を主とするコースに異動となり、英文法や長文読解など大学入試を意識して授業をすることとなりました。この時期は、もう一度最初から英文法の学び直しを行いました。再度、受験英語と呼ばれるものとの格闘の始まりです。ALTとのTT授業もこの頃初めて経験しました。

この間には、2007年に姉妹校であるワニタ高校（アメリカ合衆国・カークランド）や、2008年にローウェル高校（アメリカ合衆国・サンフランシスコ）が来校し、受け入れのための企画立案に携わったり、farewell partyのセッティングを行ったりしました。担当していたクラスのライティングの授業では、アメリカの学生と日本の高校生が活動を通じて打ち解けていく様子がよく分かりました。プログラムをアシストさせてもらいながら交流活動のために必要な心構えやスキルについて知ることができたことは、英語観を見直す有り難い経験ともなりました。

また、2008年には、中華人民共和国・北京への研修旅行（修学旅行）の引率を行いました。現地での北京第八中学との交流会に向けて、生徒たちと一緒に中国語に翻訳された日本の歌や簡単な会話の練習を事前に行いました。それ以前にも、交流会で挨拶する生徒のスピーチ原稿作成をサポートしたりするような仕事はありましたが、実際に生徒たちと北京を訪れるチャンスは初めてでしたので、ようやく自分も学校の役に立てるかもしれないという期待感を持つことができました。

2009年3月、ローウェル高校へのアメリカ海外研修の引率をすることになりました。英語の教師としては、生徒と共にネイティブの英語に触れてことばを学ぶ意義を感じることのできる大変光栄な機会でした。10日間という短期間の中でも、海外での生徒たちの様子は変化しました。もちろん良い事ばかりではありません。生徒たちは本来の自分を知って、新たな課題に直面します。その課題に向き合い、どのように壁を乗り越えたらよいのかを考えなければなりません。体調不良に苦しむ生徒もあり、短期間のうちにもモチベーションを立て直そうと葛藤している様子が伺えました。

〈9年目～現在〉

2010年6月には北京第四中学（中華人民共和国）、2012年5月には南寧中学（台湾）の来校行事があり、歓迎式典などで中国語を使う仕事に携わりました。2012年3月には、姉妹校ワニタ高校へのアメリカ海外研修をコーディネートし、引率しました。滞在中の生徒の状態把握や危機管理等、前回の引率の時と比べると配慮すべき点を多く見出すことができました。また、日本語を学ぶアメリカの学生たちの姿勢と先生の教授方法に大いに刺激を受け、帰国後は自分の授業に生かせるよう努めました。

学校内外の研修会やシンポジウムに参加しますと、自分も含めどのように英語を学んでいくべきなのかを考えさせられる機会が多々あります。学校現場における英語学習の在り方については、現在急速に変わろうとしています。グローバル化と呼ばれる現代において生徒たちの視線をいかにして外へ向けていくかは、日々の授業を行う側の責任でもあると考えているところです。

3. 分科会の内容

大学時代の自身の留学体験と、これまでに携わった国際交流事業から感じたことを紹介します。自分たちよりも若い世代の人たちの異文化間交流をどのようにサポートできるかを一緒に考えたいと思います。

分科会 1 講師の自己紹介と分科会の目的の確認

分科会 2 日本人が海外に留学すること・世界へ向けた活動とその意義

分科会 3 日本に留学生を受け入れるということ・国内での交流活動から感じたこと

分科会 4 中間発表準備

4. キーワードリスト

留学 異文化理解 自己理解 英語教育 趣味

5. 事前予習用リーディング課題

この分科会では、各人に「私にできる異文化交流のための活動」を企画していただきたいと思います。ご自身のこれまでの経験や地域社会において身近に行われているイベント等を参考にしながら、現実的にどのような活動が実現可能か、その方法や対象等を予め考えておいてください。

2016 年度国際キャリア開発プログラム「合宿セミナー」
「国際キャリア開発」事前学習資料集

発行日：2016 年 7 月 26 日

発行：宇都宮大学国際学部

〒321-8505 宇都宮市峰町 350

TEL: 028(649)5172 FAX: 028(649)5171

E-mail: kokuca@miya.jm.utsunomiya-u.ac.jp

学部		学科	
学年		氏名	